

寄稿論文

## 現場への洞察から、まちを動かすアクションへ ～市駅まちづくりの5年を振り返る～

**From the insight into the locality to the actions to drive the community:  
Review on the 5 years of seminar activities for community development around Wakayamashi station**

永瀬 節治

Setsuji Nagase

和歌山大学観光学部

キーワード：まちづくり、社会実験、公民学連携、実践的学習

Key Words：community building, pilot project, public-private-academic partnership, practical learning

Abstract：

My laboratory was established in 2012 to specialize in urban design, community building as related fields of tourism management. The practice of community-based projects has occupied an important place in our seminar activities since the beginning. Among them, the most intensive and continuing one is “Shi-eki machizukuri project” started officially in 2014 with an aim to enhance community building in the surrounding area of Wakayamashi station. Our practical activities started with an exhibition on the history of the station along with the town, led to the series of community workshops and development of the pilot projects for temporary pedestrianization and installation of green space on the street in front of the station. The students working on these projects have learned more about the reality of community involvement, strategic approach for changing current situation as well as importance of collaborative process among diverse stakeholders.

### I. はじめに

観光学部永瀬研究室（都市・地域デザイン）は、都市計画・まちづくりの視点から、地域における観光のより望ましいあり方を、現場での実践を通じて考究することを基本方針としている。私が着任したのは2012年であるが、学生たちを交えて本格的に活動を開始したのは2013年からであり、現在のゼミ活動の主力である3年生は、研究室の5期生にあたる。

前述の方針のもと、学生たちは第一に、専門的立場から地域と向き合う上で必要な知識を身につける。その上で、まちづくりの内実を現場での実践的活動（実地での調査・提案、地域の住民・関係者との対話、それらを下地とした地域でのアクションの具現化）を通じて体得する、言わば「文武両道」の研究室生活を送っている。

加えて重視しているのが「チームワーク」である。本研究室では、特定の地域を対象とした活動を「プロジェクト」と呼んでおり、3年生を中心に、時期によっては上下の学年も交えてチームを組み、プロジェクトに取り組む。さらに地域でのアクションに際しては、地元住民や行政・民間事業者等の関係者

とともにプロジェクトチームを組んでおり、本研究室の学生たちは、まちづくりの本質がチームワーク（協働作業）にあることを、身をもって学ぶことになる。

本研究室では、これまでに複数の地域を対象としたプロジェクトに取り組んできたが、なかでもさまざまな縁がつながり現在まで継続的に取り組んできたのが、南海和歌山市駅前でのまちづくり活動である。本稿では、今年で5年を迎える「市駅まちづくりプロジェクト」の軌跡を振り返り、これまでの成果と今後の展望を示したい。

### II. 和歌山市駅との関わり

地方大学に身を置いてまちづくりの研究・教育に携わる上で、足元の地方都市と日常的に向き合いながら実践する経験を積むことは、この分野においてはある種の宿命であり、見方を変えればそれこそ醍醐味でもある。私自身も、本学に赴任して以来、和歌山市中心部での「まちなか居住」を選択し、人口減少と活力低下の進む県都の窮状を肌身に感じながら、試行錯誤を重ねてきた。

全国の地方都市が同様の負のスパイラルに陥る現代において、一介の大学人にできることは限られてはいるが、都市を取り巻く諸事象やその背景を内側から捉え、思考を深めることが第一歩である。そのような考えを抱いていた2013年に、南海電鉄の担当者から山田良治・観光学部長（当時）に相談があり、同社の社員と観光学部教員有志との間で、和歌山市駅（以下、市駅）の再生に向けた意見交換の場が設けられることとなった。これはあくまで非公式的な検討会であり、その後には紆余曲折を経て着手された市駅の再開発事業に直接的に影響を与えるものではなかったが、現状認識からビジョンの提案に至る検討プロセスに私自身も参画することとなり、市駅とまちを取り巻く課題と可能性に正面から向きあう機会を得た。そしてこれを機に、研究室としてあらためて市駅と駅前のまちに関する資料収集や現地調査を学生とともに始めたのが、現在に至る「市駅プロジェクト」の原点である。

### Ⅲ. 市駅の歴史と社会的価値の発信

南海和歌山市駅は、紀の川に接する旧城下町の北西部に、明治36年（1903）に開業した。南海本線と加太線、和歌山港線、紀勢本線（かつては和歌山線）の接続駅であるとともに、1971年までは市内中心部と和歌浦方面を結ぶ市電にも結節し、名実ともに和歌山市を代表するターミナルであった。一方で、最盛期の1960年代には1日5万人を超えた市駅の乗降客数は、モータリゼーションと郊外化等により、現在では3分の1程度にまで減少している<sup>1</sup>。ぶらくり丁などの中心商業地と同様に、現在の駅前商店街に往時の面影はなく、空き店舗や駐輪場化した店舗、空き地やコインパーキング等が目立つ。

こうした状況は、衰退する地方都市の駅前市街地に共通のものである。一方で、市駅付近には和歌山城のかつての外堀である市堀川や、藩校跡地に創業した蔵元「世界一統」の酒蔵、戦国時代の鉄砲集団・雑賀衆の拠点となった本願寺鷲森別院などの歴史的資源があり、市立博物館や市民図書館などの公共施設も集積している。何より、1世紀以上にわたって和歌山市の発展を支え、多くの市民に親しまれながら現在も交通結節点としての役割を果たす市駅そのものが、まちの再生を図る上での最大の資源でもある。2013年の秋に開始した資料収集や現地調査を通じて、このような市駅とまちの歩みと潜在力について理解を深めることができた。

当時、市駅の再開発は明るみに出しておらず、和歌山大学前駅とイオンモールの開業、市駅ビルの高島屋の撤退発表に加え、明治期に架橋された南海紀の川橋梁の老朽化に対する懸念から、和歌山市民の間では「市駅廃止説」がまことしやかに噂される状況があった。そこで、市駅の社会的価値を一般市民に発信し、市駅前のまちづくりへの関心を喚起することを意図し、南海電鉄の協力を得てパネル展を企画することとなった。奇しくも2014年に市駅の開業から111年を迎えるこ

とが分かり、開業日の3月21日を含む4日間、改札前の空き区画を会場とした歴史パネル展「市駅の鼓動・都市の記憶」を行った。展示内容は、本研究室において作成した市駅とまちの年表、古写真や古地図をもとに歩みをたどる「歴史編」、駅前の建物用途の変化や景観の現状等をまとめた「調査編」のパネルからなる。これはプロジェクトの成果を地域に還元する最初の試みとなった。

その後、図らずもこの展示会を見学した高島屋和歌山店の担当者から、同年8月の閉店前に、同店の歩みを振り返るパネル展を共同で実施できないかという申し出があった。そこで、3月の展示内容に加えて、単に過去を振り返るだけでなく、今後の市駅前のまちづくりをイメージしてもらいたいとの考えから、市駅前通りや市堀川沿いなど、市駅周辺の5箇所を対象とした提案を作成し、市駅周辺の500分の1の現状の市街地模型とともに展示することとした。

「和歌山タカシマヤの歴史パネル展」との合同開催となった2回目の展示会は「まちらば ～未来を想像し、創造する～」と銘打ち、8月1日から12日間、市駅ビル1階の高島屋特設会場において開催した。まちづくりの5つの提案パネルを加えたことにより、会場に設けたコメントシートの記入コーナーでは、市駅ビルやまちの再生に向けた様々な意見やアイデアも募ることができた<sup>2</sup>。そしてこの期間中に会場を訪れた市駅地区商店街連盟会長の森下幸生氏と知り合うことができ、プロジェクトは市駅前の地域住民との関係を構築するステージへと進むこととなる。

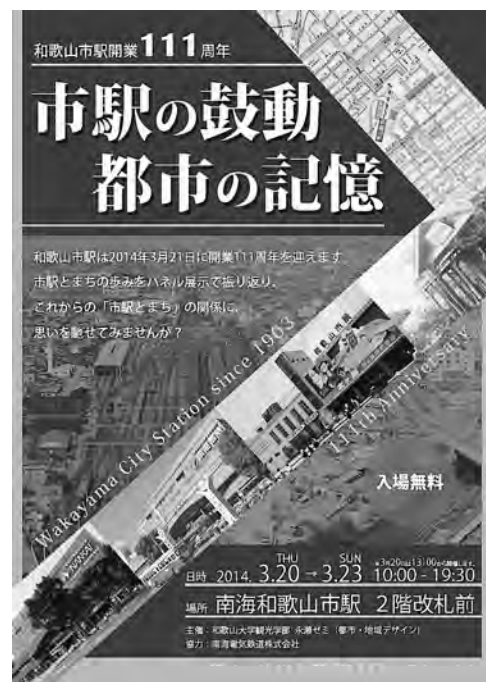


図1：和歌山市駅開業111年展示会のポスター



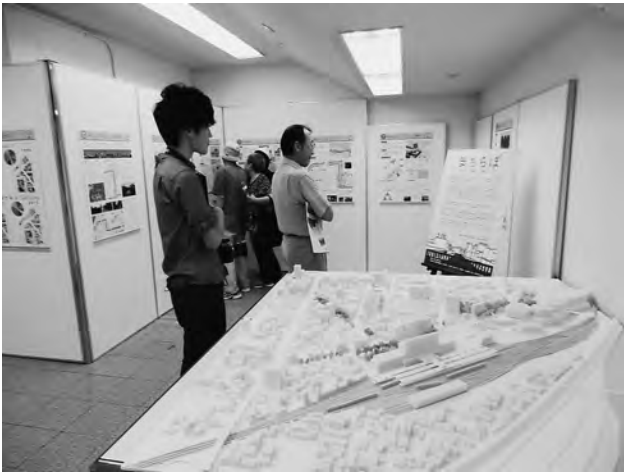


図2：「まちらば」の様子

#### Ⅳ. まちづくりワークショップの企画・運営

8月の「まちらば」会場を訪れ、我々の提案パネルに興味を示した森下氏からは、これらの内容を地域住民とともに議論する場を設けてはどうかとの提案があった。こうして開始されたのが「市駅まちづくりワークショップ」である。

このような議論の場は、市駅前でのまちづくりを見据えて活動していた我々も望んでいたものであり、本研究室が触媒としての役割を果たしながら、地域の取り組みを活性化するイメージが出来上がっていった。しかしながら、まちづくりの主役はあくまで地域コミュニティである。また一口にコミュニティと言っても、立場や世代の異なる住民が集まる機会があるとは限らない。そこで商店街組織だけでなく、市駅周辺の自治会にも参加を呼びかけ、そこに当研究室も加わる形で、「市駅まちづくり実行会議」（以下、実行会議）を同年10月に発足させた。その上で、当研究室が事務局機能を担いつつ、実行会議が主催する形で、市駅周辺の住民を集めてまちづくりについて議論するワークショップを開始することとなった。ワークショップは、商店街と自治会に加え、行政や関係団体、市駅地区以外からも参加可能なオープンな場とし、立場を超えて意見を交わし、方向性を共有するまちづくりのプラットフォームを目指した。

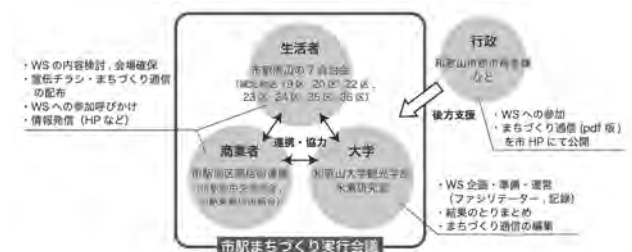
第1回ワークショップは、同年11月28日の夜に和歌山市城北連絡所にて実施した。準備の過程で、市駅周辺の大半の住民にとっては、このようなまちづくりの議論の場に参加した経験はほとんどないことが分かり、「ワークショップ」という言葉も馴染みがないと言った声もあった。果たしてどの程度の参加者があるか不安もあったが、自治会・商店街を通じて地域にチラシを配布したところ、結果的には用意したグループ討議用のテーブルが埋まるほどの参加者があり<sup>3</sup>、市駅周辺の現状・課題と地域資源について活発に意見交換を行うことができた。

こうしたオープンな議論の場の存在は、予想以上の好反応をもって市駅前の人々に受け入れられた。第1回の成功を受け、ワークショップは毎回テーマを発展させつつ、おおむね2ヶ

月に1度のペースで継続的に実施することとなった。また各回の終了後には内容を「市駅まちづくり通信」にまとめて地域に発信していった。ワークショップの企画準備や運営・ファシリテーション、まちづくり通信の編集作業は当研究室が担い、商店街・自治会は回覧板等を用いた地域内での参加呼びかけ、まちづくり通信の配布と会場の確保、さらに和歌山市都市再生課には、ホームページに「市駅まちづくりワークショップ」のコーナーを設けて、まちづくり通信を掲載してもらう等の役割分担を行いながら、2017年度にかけて計10回のワークショップを実施している。



図3：ワークショップの様子



## V. 市駅前通り社会実験「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」(市駅 GGP) の実現

まちづくりワークショップでの議論を契機として実現に至ったのが、市駅前通りでの社会実験「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」である。もともと「市駅まちづくり実行会議」の名称には、単にまちづくりに関する議論を行うだけでなく、具体的なアクションを実行する組織としての意味合いを込めている。ワークショップもアクションの一つと言えるが、単に机上で議論するだけでなく、地域で具体的な活動を「実行」することも見据えた組織として発足させた経緯がある。

最初の2回のワークショップを経て、市駅前のまちづくりを進める上では、その顔となる市駅前通りのあり方から変えていくべきではないかという方向性が共有された。続く3回目のワークショップでは市駅前通りを対象を絞って議論を行い、市駅周辺には歴史的資源や公共施設等が見られるものの、現状では駅前に人々が集まり、憩えるような場所がないことも指摘された。さらに震災復興事業により整備され、楠の並木を備えた市駅前通りそのものも貴重な空間資源であり、自動車交通量が減少する現状も踏まえ、街路そのものを歩行者のための広場として活用する試みを企画することとなった。

企画の原案は、ワークショップでの議論を下地としながら、当研究室が組み立てることとなった。その際には、単に歩行者天国を楽しむ「イベント」としてではなく、将来のまちのあり方を実験的に具現化し、その可能性を検証する「社会実験」として実施すること、その上で、現状のアスファルトの道路を中心とした通りのイメージを大きく変えるために、天然の芝生を敷き詰めて路面を緑化し、ピクニックが楽しめるような空間を実現することが骨子となった。4回目のワークショップでは、社会実験の内容案について議論を行い、方向性が確認された。

この試みの正式名称は「市駅“グリーングリーン”プロジェクト ～市駅前通りを緑と憩いの広場に作る社会実験～」である。「グリーングリーン」は緑の green と「拾い集める」を意味する動詞の glean を掛け合わせた造語であり、市駅周辺の既存の資源を集め、緑あふれる、人にも環境にもやさしいまちづくりをコンセプトとして打ち出した。現在の市駅前通りでは、西側歩道の通行量が比較的多いことから、中央分離帯の西側にあたる北進2車線の一部を歩行者天国化し、芝生のピクニックエリアを中心に、オープンカフェやマーケットが連なる広場空間の計画とともに、そこで展開されるお茶会や工作イベントなどのプログラムも企画して、2015年9月12日(土)と13日(日)の2日間に実施することとなった。

加えて、筆者と縁のあったNPO法人和歌浦湾海業の関係者の支援により、関連企画として、市駅付近を流れる和歌山城の旧外堀・市堀川に船を走らせ、水辺からまちの風景を再発見する「市堀川クルーズ」も実施することとなった。この時は幸運にも、電気による航行も可能な「プラグインハイブリッド船」の開発を手がける大阪市立大学の南繁行特任教授の協

力を得ることができ、技術のアピールも兼ねて和歌山市内で遊覧船としての運航が実現した。市駅付近には乗船場として利用できる公共用地がなかったため、付近の民地の協力を得て仮設の乗船場を設け、12日は京橋付近までのUターン運航、13日はぶらくり丁の雑賀橋にも乗船場を設け、2つの乗船場の間での交互運航を行った。

一連の社会実験の実施日程に関しては、12日は和歌山青年会議所が主催する「市駅プロジェクトマッピング」<sup>4</sup>、13日はぶらくり丁商店街で同年から定期的に行われていた「ボロボロハスマーケット」<sup>5</sup>とそれぞれ連携することで、まちなかの回遊性を高めることが意図された。当日は晴天に恵まれたことで予想以上の人出があり、歩行者空間に対するニーズ等を把握するためのアンケートにも多くの来場者から回答を得るとともに、こうした街路や河川を活用したまちづくりの方向性に対しても多くの来場者から共感が得られ、想定以上の成果を上げることができた。何より、こうした大掛かりな社会実験を、市駅周辺の商店街と自治会を中心とした地元住民が連携する形で実現できたことも、市駅のまちづくりを前に進める上での大きな収穫であった<sup>6</sup>。



図6：2015年の市駅GGPの様子



図7：市堀川クルーズの様子



## VI. 社会実験の発展とビジョンの構築：市駅 GGP2016 ～市駅まちづくり実現構想

2015 年の社会実験の実現を通じて、市駅前通りの歩行者空間の拡張や、市堀川の活用など、市駅周辺の空間資源を活用したまちづくりについて、市駅まちづくり実行会議を構成する関係者間で具体的なイメージが共有化されていった。その後もワークショップを重ねながら、翌年にはさらに内容を発展させた社会実験を企画することとなった<sup>1</sup>。

「市駅「グリーングリーン」プロジェクト 2016」の新たな試みの一つは、歩行者天国の実施期間の拡張である。より常設に近い状況を実現すべく、平日を組み込む形で、9 月 30 日（金）～10 月 2 日（日）の 3 日間を確保するとともに、芝生エリアについては前年の 1.25 倍に面積を広げ、夜間・早朝を含め 24 時間開放することとした。一般道路の 24 時間通行止めによる歩行者天国化の試みは、全国的にもほとんど例がなく、警察の許可が容易に得られないことも想定されたが、和歌山西警察署の尽力により、地域活性化のための「社会実験」であるという前提のもと、近畿圏内で初となる試みが実現した。

加えて、市駅前通りの歩行者天国、市堀川クルーズとともに、市駅周辺に散在する店舗や公共施設等で、ものづくりや食、歴史文化に関する特別な体験プログラムを提供する「市駅まちぐるみミュージアム」を企画した。それまでのワークショップにおいても、市駅周辺の地域資源を活用したさまざまなコンテンツを観光客等に提供するアイデアも出されており、それらを期間限定で実現することを意図したものである。開催期間は 9 月 15 日（木）～10 月 2 日（日）の 18 日間であり、期間中に公共施設、民間の店舗・事業者・団体、大学研究室から計 45 ものプログラムが提供された<sup>8</sup>。

その他、2 年目となる市堀川クルーズは、和歌山市所有の船を活用するとともに、市堀川沿いの京橋駐車場を会場に和歌山市が主催する「まちなか河岸にぎわい横丁」と連携して実施することとし、市駅前と同会場前での運航が行われた。マーケットエリアに関しては、1 年目は和歌山青年会議所とポボロハスマーケットに運営を委ねたが、2 年目からは自前で出店者を募り、ビアガーデンと合わせて一定の収益を上げることができた。さらに観光学部 LIP<sup>9</sup> の 4 グループからも出店協力を得たほか、芝生エリアでのライブステージにも学生の演奏団体に出演を依頼するなど、賑わいづくりに大学のネットワークを活かすこともできた。期間中はおおむね天候に恵まれたことで、延べ約 7500 人（推定）の来場者があり<sup>10</sup>、アンケートを通じて一定のリピーターの存在も確認された。

2 回の社会実験を通じて、歩行者空間や広場等の憩いの場の創出、市堀川の魅力向上、まちぐるみミュージアムによる地域の多彩なコンテンツの活用など、市駅前のまちづくりは具体的なイメージをもって共有化されていった。これらの実績と、3 年余りのワークショップにおける議論を踏まえ、当研究室で作成したのが「市駅まちづくり実現構想:2017 ▶ 2050」である。

これは現在から約 30 年後までを見据えた市駅前のまちづくりの将来像を提示するものであり、ワークショップの最終的な目標として当初から掲げていたものである。内容は「シンボル軸を活かす」「水辺を活かす」「エリアの特色をつくる」「コミュニティを育てる」「周辺地域とつながる」の 5 つの基本方針を定めるとともに、それを具体的に実現するための 36 のプロジェクトを、実施時期や想定される実現主体とあわせて提示した。プロジェクトには、市駅前通りや市堀川遊歩道などのハード整備、リノベーションによる既存の建物等の活用、シェアサイクルやループバス、LRT などの交通システム、地域イベントや観光プログラム、エリアマネジメントの仕組みづくりまでが含まれる。これらの内容は、2017 年 3 月に開催した第 10 回ワークショップにおいて「暫定版」という形で発表し、各プロジェクトの実施によるまちづくりのシナリオについて意見を交わすことができた。

## 市駅まちづくり実現構想 2017 ▶ 2050

### ◆36 のプロジェクト

- |   |  |   |  |  |  |
|---|--|---|--|--|--|
| 1. シンボル軸を活かす<br>1-1 市駅前トランジットモール<br>1-2 市駅グリーンプロムナード<br>1-3 ぐすのきマルシェ<br>1-4 市駅にぎわいステージ<br>1-5 思い出の市電力フェ | 2. 水辺を活かす<br>2-1 市堀川下町クルーズ<br>2-2 市堀川香合テラス<br>2-3 寄合レストランクルーズ<br>2-4 つながる市堀川遊歩道<br>2-5 渡船屋でいっしょ<br>2-6 川みせ計画<br>2-7 内川クリーンアクション<br>2-8 SUP・カヌー体験<br>2-9 紀ノ川羊羹会 | 3. エリアの特色をつくる<br>3-1 雑貨屋市ミュージアム<br>3-2 熊鷹メモリアルパーク<br>3-3 和歌山「しるく」ツアー<br>3-4 市駅前紀州河岸<br>3-5 市駅クリエイティブイースト<br>3-6 杉ノ馬場おとな横丁 | 4. コミュニティを育てる<br>4-1 市駅エリアマネジメント<br>4-2 まちぐるみミュージアム<br>4-3 まちカル教室<br>4-4 ふれあい市民広場<br>4-5 みんなのDIYガーデン | 4-6 にぎわい青空コンテナ広場<br>4-7 若者×高齢者シェアハウス<br>4-8 コワーキングカフェ<br>4-9 鷹の森秋まつり | 5. 周辺地域とつながる<br>5-1 まちなかシェアサイクル<br>5-2 まちなかループバス<br>5-3 まちなかRT計画<br>5-4 市駅みどりの回廊<br>5-5 市駅南北自由通路 |
|---|--|---|--|--|--|

図 8：市駅まちづくり実現構想（市駅グリーンプロムナード）

## VII. 実現手法・体制の模索と進化：市駅 GGP2017

2017 年 9 月には、3 度目となる「市駅「グリーングリーン」プロジェクト 2017」を実施することとなった。今回の最大の課題の一つは資金調達であった。もともと学生や地域住民、関係者のボランティアにより支えられた社会実験であるため、人件費は最小限に抑えられている。一方で、全予算の半分以上を占めるのが、車両通行止めに伴う警備費用である。日中をメインに 2 日間実施した 1 年目は、企画を連携した和歌山青年会議所が 1 日分を負担し、2 年目は和歌山県からまちづくり活動に関する助成金を得ることで、夜間を含む計 54 時間の警備費用を何とか捻出することができた。しかし 3 年目は行政からの助成金が得られず、民間から相当の資金を集めるか、規模を縮小して実施するか判断が迫られることとなった。

「社会実験」である以上、新たな試みを加えながら内容を発展させるべきとの判断から、今回は初めてクラウドファンディングを導入し、地域内外から広く支援者を募ることとなった。目標額を 100 万円に設定した上で、さまざまなリターンメニューを用意し、ホームページや facebook 等で広く支援を呼びかけたところ、最終的には計 79 人から 65 万 9 千円を集めることができた。

3 年目は実施体制の拡充も試みた。従来の「市駅まちづくり実行会議」を中心に、以前から協力を得ていた関係者を加えて「市駅“グリーングリーン”プロジェクト2017 実行委員会」を結成した。企画や調整の多くは実質的に当研究室が担ったが、5 月以降、計 5 回の実行委員会を開催し、準備の進捗状況の共有化と連携体制の強化を図った。

社会実験の実施期間は 9 月 8 日（金）～ 10 日（日）の 3 日間（夜間・早朝を含む計 48 時間）であり、歩行者天国は前年と同様のエリアを確保した上で、9 日には南側を「市駅夏まつり」の会場として活用した。加えて、まちづくりの将来像を提示する「社会実験」としての意味合いを明確に発信するため、「公共空間を楽しもう!」をキャッチフレーズに、ポスターやホームページ等で情報発信を行った。8 日の夜には、公共空間の活用を実践する研究者、行政職員、民間組織の代表者を迎え、芝生エリアの特設ステージにて「公共空間トークセッション：暮らしを豊かにする公共空間のつくり方」を実施したほか、公共交通の利用を促すための和歌山バスとの連携企画や、老舗茶舗の玉林園との協力による「グリーンカフェ」、「和歌山地酒 BOMBER」の協力による「地酒・ビアガーデン」など、地域内外の企業等からの協賛・協力も得ながら、多彩な企画を実施した。

毎年好評の市堀川クルーズについては、今回は和歌山市が実施する水辺活用の社会実験「わかやま水辺プロジェクト」と連携する形で実施し、10 日は 1 年目と同様、市駅前と雑賀橋に乗船場を設けて相互に行き来ができるようにし、ぶらくり丁で開催されるボポロハスマーケットと連携してまちなかの回遊性を創出することとした。

2 年目となる「市駅まちぐるみミュージアム」については、前年の来場者・プログラム主催者からも好評であったことから、今回は歩行者天国に合わせた 3 日間で計 23 のプログラムを用意し、集客面においても相乗効果を図ることとした。新たなコンテンツとして、わかやま未来学副専攻のプログラムと連携し、学生有志が市駅東商店街の空き店舗をリノベーションしたフリースペース「Forêt」での雑貨づくりワークショップや、南海電鉄和歌山車庫の見学会、浴衣の着付けや小物づくり等を組み合わせた「はんなり変身ツアー」なども実施した。

一連の内容の拡充や、ホームページ・facebook、マスメディアによる広報、さらに今回は晴天に恵まれたことで、3 日間で延べ 1 万人近い来場者があった<sup>11</sup>。アンケート結果からは、市外からの来場者の割合が 1 割程度増加するとともに、家族連れが増え、一定のリピーターも見られるなど、地域内外に取り組みが浸透していることも窺える。さらにこの年は大阪市、堺市、神戸市、松山市などの行政職員の視察もあり、公共空間活用の先駆的な取り組みとして、対外的にも認知されるようになっていく。加えて、クラウドファンディングの導入や、地元企業・個人からの協賛金、マーケット・オープンカフェの出店料、地酒・ビアガーデンの収益等により、最終的な社会実

験全体の収支も良好な結果を得ることができ、地域主導による公共空間活用を軸とした社会実験の実現手法について、新たなノウハウを蓄積することができた。



図 9：市駅 GGP2017 実現のためのクラウドファンディングサイト

## VIII. おわりに

2017 年から市街地再開発事業による和歌山市駅の建て替え工事が本格化するなかで、市駅前のまちづくり気運を醸成し、具体的なまちの方向性を共有化する取り組みは、ますます重要性を増している。当研究室と市駅前地区の連携による「市駅まちづくり実行会議」が中心となって実践してきた「市駅“グリーングリーン”プロジェクト」は、同時並行的に進められている遊休不動産のリノベーションの取り組み 8 とも連動する形で、和歌山市のまちなか再生に新たな風を起こしつつある。我々が実践してきた市堀川でのクルーズ船運航や、リノベーション関係者によるカヌー・サップ体験などの取り組みが契機となり、今年度は市主催の社会実験「わかやま水辺プロジェクト」が実施されている。さらに来年度は市が中心となり、市駅前通りにおけるより長期間の社会実験を実施する方針を示すなど、一連の取り組みは和歌山市の都市再生施策にも少なからぬ影響を与えるようになっていく。

2014 年から地域とともに実践してきた「市駅まちづくり」は未だ道半ばであるが、活動内容はこの 5 年間の間に着実に発展し、単に研究室がまちづくりに協力するレベルから、都市空間・コミュニティの実体を動かすレベルへと進化している。この間に、当研究室が関わりを持つ主体は、市駅前の商店街・自治会、和歌山市の行政職員をはじめ、南海電鉄や和歌山バス等の交通事業者、市内のリノベーション関係者、NPO 等の民間団体、まちなかの店舗や地元企業など、大きく広がりを見せてきた。現在のゼミ 5 期生も、先輩らが築いた実践手法や関係者との信頼関係の上に、さらなる展開可能性を追求しながら、活動を受け継いでいる。我々の活動そのものが、衰退するまちなかにおいて希薄化するソーシャル・キャピタル（地域社会の信頼関係や人的ネットワーク等の社会関係資本）を再構築するための触媒となり、また学生たちにとっても、

ここでしか経験のできない価値ある実践となるよう、今後も「市駅まちづくりプロジェクト」の可能性を探究していきたい。

## 注

- 1 南海和歌山市駅の1日平均乗降客数は、ピークを迎えた1962年には54,353人であったのに対し、2013年は17,569人となっている。(南海電鉄提供データによる)
- 2 永瀬節治・井口奈美・前田航一(2015)「和歌山市駅におけるまちづくり展示会で抽出された「駅とまち」に対する市民意識 ―地方都市の駅を中心とした公民学協働のまちづくりに関する研究 その1―」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画部門)』pp.29-30
- 3 第1回の市駅まちづくりワークショップには、当研究室を含め計46人が参加した。
- 4 9月12日の夜に、南海和歌山市駅の駅ビルに映像を投影する「プロジェクションマッピング」が開催された。
- 5 2015年よりぶらり丁商店街にて毎月第2日曜日に定期的に開催されている、手づくりの雑貨や地域の食材を提供するこだわりの店を集めたマーケットイベント。
- 6 一連のワークショップや社会実験により、まちづくりに対する気運は醸成されてきたが、2015年の社会実験後に実施したアンケートによれば、商店街と自治会、当日の参加者と非参加者といった関わり方の違いによって、取り組みや今後の方向性に対する認識に差があることも明らかになっている。(井口奈美(2016)「公民学の連携・協働の駅前まちづくりに関する研究 ―和歌山市駅周辺市街地を事例に―」和歌山大学観光学部卒業論文)
- 7 2015年と2016年の実施内容の比較については、岡美里・妹脊惇史・吉岡香奈・永瀬節治(2017)「地域組織を主体とした市駅前通り社会実験の発展のあり方に関する考察 ―公民学連携による地方都市の駅前市街地再生に関する研究 その7―」『日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画部門)』pp.415-416に詳述。
- 8 永瀬節治・柿木理菜・赤澤由真・和田隼人(2017)「まちなかの地域資源を活かした公民学連携による体験プログラムの可能性 ―和歌山市駅周辺における「市駅まちぐるみミュージアム」の実践を通じて―」『観光学』17号, pp.21-34
- 9 観光学部の学生が地域の主体と連携・協働して地域課題の解決に取り組む「地域インターンシップ・プログラム(Local Internship Program)」の略称。
- 10 実施エリアに隣接する歩道上で行った歩行者通行量調査に基づく推定時である。
- 11 芝生エリアの受付時間帯に把握した利用者数と、一部の時間帯・地点において計測した歩行者通行量を基にしたおおまかな推定値である。
- 12 和歌山市では、空き家・空きビル等の遊休不動産のリノベーションによるまちなか再生を推進するため、北九州市で開始された「リノベーションスクール」を2012年に誘致して以降、定期的に開催し、参加者による事業化につなげている。